

「家族で治そう認知症」

家族インタビュー 2

最期まで在宅で

喜多さんは88才。息子夫婦と同居で「つどいの家はむろ」とは2003年からのお付き合いです。要支援でヘルパーの診療同行やデイサービスを利用されています。当時すでに認知症状がうかがわれ、以後5年間で要介護1から要介護5まで進行しています。認知症状は幻覚や物取られ妄想・帰宅願望にはじまり、失禁・徘徊から次第に昼夜逆転・異食行為などと多様です。また、白内障・大腿骨頸部骨折・誤嚥性肺炎などで入退院がありました。そのたびにレベルが低下し褥創も出来、いまは車椅子使用状態となっています。

この間のご家族の介護の大変さについては想像を超えるものがあります。それでも在宅介護を続け、すごい事を笑いながらさらりと話すお嫁さんとそれを支える息子さんには驚嘆するものがあります。

今回は息子さんご夫婦にお話を伺う機会を得ました。2時間ほどの短いインタビューでしたからその大変な体験のほんのさわりだけかもしれませんが、参考の一助になれば幸いです。取材は中越と吉原（記録）が担当しました。この資料は取材内容を要約し編集したものです。（敬称略）

どこまでが性格で、どこからが病気なのか

中越 「家族が認知症状に気付くには発症してから何年も後になることが多いのですが、今から考えていつからおかしいと思いましたか。」

嫁 「人が見えるなどの幻覚が出てきたのは10年ほど前です。」

息子 「お金が無くなったという話も出ました。孫が取ったとも言っていました。」

嫁 「それは長男が幼稚園の頃ですね。おじいちゃんのガンが見つかって度重なる入院とその付き添いに時間を取られたこともあって息子がわたしに甘えられない状況になったんですね。おばあちゃんとお母さんを取り合うことになって、家の中で一番弱い立場の息子のせいにするようになったんだとおもいます。」

中越 「孫のせいにして辻褄を合せようとしている？」

嫁 「私が出かけるとき子供に『片付けといて』と言って出かけると、おばあちゃんがきちんと片付けないと言って息子をぶっていたんです。また、おばあちゃんが何度も子供に小遣いをやって子供はそれをわたしに言わずにちゃっかり溜め込む。おばあちゃんはことの顛末を忘れてお金が無くなったと言う。そんなとき子供の肩を持つと激怒していましたね。」

息子 「病気かどうかの判断が難しかったのは、もともと昔から激情的なところがあったからですね。わたしの小さいころから物の置き方とか食事の時間帯を守らないとかで突然怒り出すようなことがありました。ちょっとしたことで『死んでしまえ』とかも言われました。父が70ぐらいのときにすでに、ありもしない父の浮気を疑うような

ことを言っていました。父は亡くなる数年前には母がボケたことに気づいていたようでした。」

中越 「デイサービスではおっとりした上品な感じの人とっていましたね。」

息子 「母は昔の良妻賢母教育を受けていて、外では自分を出すもんじやないと信じていたと思います。」

嫁 「娘がアトピーで食べさせられないものが多いのに、おばあちゃんは食べさせて悪化させたあげく症状がひどくなると病院に連れて行けと騒いでました。」

息子 「自分のいうことは正しいと信じてましたね。」

嫁 「入院しているおじいちゃんのところに洗濯物が届かないこともありました。『届けたのにおじいちゃんが捨てた。』とか言っていました。MRSA がうつるとかも言っていましたね。」

息子 「父が危篤のときには、親族が集まっているのに2階から降りてこない。父の世話も全部嫁にまかせきりでした。若いころに苦労をさせられたことが染み付いて母は被害者意識が強かったです。確かに無理もないような苦労をしています。でも、父の65歳までの20年はコツコツと働いてそのおかげで年金もしっかり出て今も母は楽に生きて行けているのに……。どこまでが性格でどこまでが認知症のせいなのか？よくわかりませんね。ただ、そんな母に正面切って罵声を浴びせたり喧嘩したりしていたのはまずかったです。私自身の平衡を保つために大人になりきれなかった。仕事もあったけど出来れば母と関わりたくなかったんです。妻にまかせきりでした。」

大変だったのは初期のまだ元気な頃

中越 「お嫁さんの関わり方は色々なことを吸収して懐が深いですね。」

息子 「妻は苦労を苦労と思わないところがあります。でも妻が言いたくないことは出来るだけ私が言う。私の言うことは聞かないと怖いと母は思ってたみたいです。」

嫁 「おばあちゃんの認知症だと思う症状をデイで相談したい気持ちはあったんですが、デイで上品（良い人）にしてるおばあちゃんの悪口を言っているようでおばあちゃんのことをあまり話せませんでした。」

中越 「一番大変だったのは何時ごろですか？」

嫁 「要介護2ぐらいが大変でした。自立心が強く自分のことは自分でしたい人でした。物忘れがひどいので同じ対応をしてもその日によって反応が違う。わたしはなんで怒っているのか訳がわからないしおばあちゃんの様子に納得もいかない。なにかが無いと探したり急に怒り出したり、被害妄想があったり、私に言えないことのストレスを子供たちにぶつけてみたりで大変でした。私はいつもいつも物を探す毎日でした。」

息子 「今でも切れたら暴言を吐くし、顔色が変わります。最近もセーターを着替えさせた時に静電気で痛かったらしく『タバコの火を押し付けた。なにををするのっ!』と睨みつけられました。そんなときはわたしも遠慮なく『アホボケカスッ』と返してませんが。常に良い人であろうとすると身が持たないと思います。」

嫁 「同じ徘徊でも『ここから出してください』と『ここに住ませてください』の両方がありました。

中越 「その後新阿武山病院で診断を受けましたね。」

嫁 「アルツハイマー病と言われた時は病気だったんだって納得しました。ほんとうに気持ちが楽になりました。」

夫も介護に参加

中越 「昨年仕事を辞めて介護に参加しましたが、なにか変わりましたか。」

息子 「母の介護のために辞めたわけではありませんが結果的には非常に良かったです。2年ほど前から妻の実家で野菜も作り始めていていつかは農業をしたかったのもあります。私が介護するようになって母の調子が良くなって落ち着いてきました。息子ともぎすぎすしなくなって、私の精神的なストレスが家庭内の問題の根本原因だったと今は思います。受け入れることで母の顔付きも変わりました。こんなことならもっと早く介護に参加すべきだったですね。仕事に使っていたエネルギーを転用できるし。経済的な余裕がないと無理なことではありますが。でも能力不足で仕事と両立は無理だったかも知れないです。」

嫁 「私の父が8年前から半身不随で母が在宅介護をしていたのですが、昨年6月母にガンが見つかり実家のほうでも介護が必要になりました。それと、昨年10月に精神科病院におばあちゃんの入院を勧められたことがありました。そのとき『もしそうなるともう退院はできない。拘束もします。』そう言われました。悲しくてそれは出来ませんでした。うちは二人で見れるし精神科入院にしてしまうのは嫌だと思いました。」

息子 「丁度そのタイミングで仕事を辞めたことになりますね。」

中越 「ご主人が辞めて介護に参加したことはいかがですか。」

嫁 「私も助かりますがおばあちゃんにとっては一番いい事だと思います。」

苦労を笑いながら話す

中越 「『お嫁さんが大変な介護の状態をいつも笑いながら話すのはすごい』と吉原から聞いています。」

息子 「妻はすごく良く寝ているので体が持つのだと思います。子供は母親には気を遣っていてお腹がすいたらわたしに言います。料理も私のほうが丁寧に作るんですけどね。」

吉原 「幻覚の話で、お母さんが眠ろうと自室に行った時に『ベッドの上にいるんな人がいるから私は寝られないの！』と訴えてきたので、『じゃあ私のベッドだからみんなのいてって言ったら！』と答えたら納得して寝たと笑いながら話すのを聞いて、思わず私も笑ってしまいました。」

嫁 「幻覚はパーキンソン病の薬の影響もあるかも知れない。」

息子 「いまはあまり出ていない。でも毎日の変化が大きい。まだら模様ですね。」

中越 「幻覚は本人にとっては現実ですよ。現実と捉える事が出来たのは何時からです

か？」

息子 「最初から頭ではわかってました。頭では分かっているけど認めるとこっちがおかしくなる。腹が立てば怒ったりもして。完璧なことはできません。開き直りが要ると思ってます。」

嫁 「私が否定したら次は私が悪者で登場するんです。それにおばあちゃんに強く言われるとほんとかな、とかいう気になったりもします。」

息子 「それは性格かもしれない。」

嫁 「作話がいっぱいあって納得はしないけど、そうかなって思ってしまうんです。」

息子 「そうかなって思えるからなんとかなるんでしょうが、そう思える人はなかなかいないと思う。私にはできません。」

ご夫婦は 2,007 年 11 月に開かれた[認知症を理解し、地域で支えるフォーラム]の長谷川和夫先生の講演会や関係者のパネルディスカッションに参加しておられます。学んだことを吸収するだけでなく、状況に応じて工夫する対応力はすばらしい。例えばショートステイで悪化した褥創を、家庭介護で治してしまう等です。認知症への過度な恐怖感や不安をあおるニュースの多い中、地域の支えや連携をいかしながら、できるだけ在宅で愛する家族と共に過ごせるこうしたニュースがもっとあって良いと思います。